博士論文要旨

遊廓と客　――寛文～宝暦の遊女評判記を主として

髙木まどか

本稿の目的

本稿は、近世遊廓において客になることを嫌がられた人々に着目し、それらの人々がいかに遊廓において忌避・拒否されたかを具体的に明らかにすることで、先行研究に広くみられる「近世遊廓においては客の貴賤が問われない」といった言説に疑義を呈するものである。

近世の遊廓については多くの分野で研究蓄積が重ねられてきたが、それらの中に広くみられる興味深い見解に、近世遊廓は客の貴賤が問われない非日常の場であった、というものがある。つまり遊廓は近世一般の秩序―とりわけ身分秩序を排除した場であり、それによって客は貴賤にとらわれることなく「公平」に遊ぶことができたというのである[1]。しかしこうした説明は必ずしも実証に基づいておらず、これに対し遊廓の「非日常的な性格のみが往々にして強調される」との批判を行う立場も存在する[2]。だが現在に到るまで、双方の立場間で実証に基づく議論の応酬はなされていない。それにも関わらず、近世遊廓が貴賤を問われない場であるとの説明は現在においてもみられ、ある種の定説と化しているように思われる。

こうした説明が絶えず存在し続けている背景の一つとしては、近世遊廓を「文化」の発祥地として肯定的に捉えようとする傾向が根強く存在することが挙げられよう。そうした文脈の中では遊女が凄惨な状況に生きたこと等が留意されながらも、近世遊廓から生じた種々の「文化」、具体的には「野暮」や「粋」といった遊興理念や、遊女が上座に座るといった遊廓内の特異な慣習、あるいは遊廓が文学や歌舞伎の題材とされてきたこと等が注目され、いかに遊廓が「文化の発祥地」であったかが肯定的に論じられてきた。そうした文脈においては、遊廓が「テーマパーク」であったと称されることさえも珍しくはないのである。

無論、こうした言説に距離をおく議論は断続的に存在する。とりわけ近年では都市社会史に周縁的身分論の視点を加え、遊廓をその周囲との関連で重層的な「遊廓社会」として捉えようとした塚田孝・吉田伸之[3]や、遊女を買う資金の調達や遊女の個別事例に注視した横山百合子[4]、近世における売春観、すなわち国家や人々の倫理的判断・倫理的対応を詳らかにした曽根ひろみ[5]等の研究成果が著しい。但し先に挙げた「客が貴賤を問われない場」であるという遊廓をめぐる言説について言えば、遊廓における客の貴賤のあり方を精査し、そうした言説を真っ向から問うような議論はみられない。とりわけ遊廓における客の貴賤について言えば、大正～昭和前期に三田村鳶魚が包括的且つ精緻な研究を行って以降、議論が進展してきたとは言い難い[6]。本稿では以上のような問題意識のもと、近世遊廓に対する肯定的な態度、もっと言えばある種の理想視に疑義を唱えることを大きな目的とし、その手段として、近世遊廓、とりわけ江戸吉原に通い遊んだ客の貴賤を論じた。

依拠する史料

本稿では主な典拠として寛文から宝暦頃（十七世紀半ば～十八世紀半ば頃）までに作成された仮名草子の一種である遊女評判記を扱う。客を論じるにあたって遊女評判記が特に重要なのは、多くの場合その作者が遊女の買い手であり、作者自身や作者を取り巻く客らの体験や見聞を元に、実在した遊女の容姿や性格等について詳細な記述がなされているという点である。遊女評判記の中でも、諸分秘

伝物と呼ばれる遊びの手管を伝授する類の書は物語に仮託したものが多いが、遊女の評判を主題とした評判物は、遊廓や実在の遊女の内情を事細かに暴露したある種のゴシップ紙である。無論その背後に板元やパトロンの思惑があったことには留意しなければならないが、書き手の目を介した遊廓の実情が存分に著されているという意味で、充分に読み解く価値のある史料である。本稿ではこの遊女評判記を主な史料に据え、遊女評判記が盛んに刊行された寛文から宝暦頃までの遊廓、とりわけ江戸吉原において客の貴賤がいかなる意味をもったかを考察し、遊廓が貴賤を問わない場であったという言説に対しその実態を描き出すことを目指す。

本稿の構成

第一章から第三章において本稿全体の前提を論じることとし、まず「第一章　近世遊廓に見出される江戸への憧れ――研究史の整理と問題点」では本稿全体に関わる研究史として近世遊廓が客の貴賤を問わない場であるとの言説がいかに展開されてきたかを整理・概観する。「第二章　吉原遊廓における客の取締まり――公儀との関係をめぐって」では、吉原遊廓における客の取締りを公儀との関わりから総括的に論じる。「第三章　遊女評判記の概要――その変遷と書き手・読み手」においては本論文の方法を明らかにするために、本研究の主要な史料となる遊女評判記の定義および内容の変遷に加え、遊女評判記の中でも本稿で特に注目する延宝期前後の評判物に注視し、その書誌的考察を行う。第四章以降は客についての具体的な分析を史料に基づき行うこととし、まず「第四章　吉原遊廓における客と客」においてはそもそも吉原において客らがいかなる関係性をもっていたかという、客を論じるにあたり必要な基礎的考察を行う。「第五章　遊女に矛先を向ける客――遊女評判記にみる「さし合」」では同じく基礎的考察として、「さし合」という遊廓内の客に関するきまりに注目し、客の選択をめぐり誰が責任を負ったかという点について考察する。続いて「第六章　吉原における客の貴賤」では遊廓における客の貴賤が当時の遊女評判記においていかに記述されているかを分析し、何故遊廓が貴賤を問わない場と説明されてきたかを論じる。「第七章　客として嫌がられた役者」では役者がいかに吉原遊廓で忌避・排除されてきたかを遊女評判記から明らかにし、「第八章　長崎丸山遊廓で捕縛された「穢多」「非人」「無宿」――『犯科帳』を主として」では吉原を対象とした史料からのみでは明らかにできない客としての「穢多」「非人」および「無宿」について、長崎奉行所判決記録を史料として論じる。以上を踏まえた上で、「第九章　結」において本稿の議論を概括することとしたい。

1 西山松之助『くるわ』（至文堂、一九六三）［同著『近世風俗と社会 西山松之助著作集 第五巻』吉川弘文館、一九八五所収］他。

2 中野三敏「すい・つう・いき：その生成の過程」（相良亨他編『講座 日本思想 第五巻 美』東京大学出版、一九八四）。

3 塚田孝「吉原―遊女をめぐる人々―」（『身分制社会と市民社会』柏書房、一九九二）他、佐賀朝・吉田伸之著編『シリーズ遊廓社会　三都と地方都市』（吉川弘文館、二〇一三）他。

4 横山百合子「遊女を買う：遊女屋・寺社名目金・豪農」（佐賀朝・吉田伸之著編『シリーズ遊廓社会 三都と地方都市』吉川弘文館、二〇一三）・同著「「梅本記」：嘉永二年新吉原梅本屋佐吉抱遊女付け火一件史料の紹介」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇〇集、二〇一六）他。

5 曽根ひろみ『娼婦と近世社会』（吉川弘文館、二〇〇二）。

6 三田村鳶魚『江戸時代のさま〴〵』（博文館、一九二九）・同著『吉原に就ての話』（青蛙房、一九五六）等。